キャンパスの設計者 山本理顕氏と振り返るあゆみ

山本理顕 RIKEN YAMAMOTO

1945年生まれ。建築家。山本理顕設計工場　代表
公募によるコンペティションで、公立はこだて未来大学の建築設計を担当。2001年度北海道赤レンガ建築賞、2002年日本建築学会賞など多数受賞。2018年より名古屋造形大学学長。

聞き手
公立はこだて未来大学
木村健一
美馬のゆり
美馬義亮

「壁のない空間」は「未来大らしさ」の原点 使い手と設計者の思いがひとつになったキャンパス

未来大を象徴するガラス張りのキャンパス。5階まで吹き抜けのオープンスペース「スタジオ」からは、この20年で学生や教員によるユニークな研究が数多く飛び出しました。未来大らしい学びを可能にする開放的なキャンパスの設計者・山本理顕さんに、設計当時のことや建築に込めた思いをうかがいました。

建築家がカリキュラムの会議にも参加し 濃密な議論から築き上げた理想の大学像

―― 今や未来大の代名詞ともいえるのが、開放的なキャンパスです。この空間があるからこそ、未来大らしい学びが実現できています。設計者として、どのような思いでこのキャンパスを手掛けられたのでしょうか。

山本理顕氏（以下、山本）　未来大の設計に携わったことは、私にとって非常に新しい経験でした。

通常、私たちは建物を設計するとき、基本的にその建物を使う人たちと綿密な話し合いをしながら要望を聞き、最良と思われる設計を提案しています。しかし未来大の場合、そのはるか上を行く濃密さで関わることができました。当時、若い研究者たちが中心となって組織する計画策定専門委員会の中で設計につ

いて話し合っていたのですが、先生方が空間に対してものすごく大きな期待を持っていることがよく伝わってきました。設計者とその建築を使う人との考え方が、同じ方向を向いているということの居心地の良さと言うのでしょうか。健康上すごくいい忙しさを感じる毎日で、とても楽しかったですね。

―― 当時は細かな注文も多かったと思いますが、無理なお願いもあったのではないでしょうか。未来大の中身を理解していただきたいということで、カリキュラムに関わる会議にまで毎回、出席していただきました。

山本　基本的には最初から空間全体に対して、私の設計に賛同していただいていました。そのため委員会からいただく指摘や注文は、まったく苦になりませんでした。むしろ、次はどんなことを言ってくれるんだろうと期待すら抱いていました。

当時、複雑系とか情報アーキテクチャなんていう学科はどこにもありませんでしたから、私たちも手探り状態。先生たちとのお話によって、すごく鍛えられました。

そうした濃密な議論を重ねる中で、どのような大学が求められているのかが徐々にわかっていったのだと思います。それまで、いくつもの学校建築を手掛けていましたが、私たちの提案がまったく受け入れられないということもありました。しかし、未来大の先生方は、「こういう空間を作りたい」という私の気持ちと非常に近いことをおっしゃっていました。さまざまな注文や要望は、お互いにこの空間を良いものにするためのこと。私にとっても大変ありがたいことでした。

カリキュラムのことまで私たちに相談していただいたことも、うれしく思っていました。本当の意味で一緒に大学を作っていく雰囲気がありましたから。函館市の担当の方も非常に協力的で、自由な大学づくりが実現できたと思っています。

―― 今のキャンパスになるまで、さまざまなアイデアが出ては検討され、何度も設計図を改定していただきました。

山本　はじめは分棟式でしたよね。いろいろあって最後は全部ワンボックスの中に入った。とても画期的な決断でした。それから設計は飛躍的にやりやすくなりました。つまり、中のアクティビティが本当に自由になったんです。体育館での活動とスタジオでの活動との関係について考えられるようになり、キャンパス全体が学びの場だということを共有できたような気がします。

議論の中で、「未来大にとっての市民開放は、体育館の開放ではない」と訴えた先生がいらっしゃいました。私もその考えに同感です。多くの大学は市民開放として、単にキャンパスの広場を開放したり、体育館や図書館を開放したりしていますが、未来大が考える社会開放、市民開放は大学の思想そのものを開放することなんです。そういう大学を目指しているということが、建築家として心から共感できました。未来大のプロジェクトに参加できて、本当にたくさんのことを学んだ気がします。

未来大の特徴の1つでもある、コミュニケーションの可能性を最大限に引き出す「互いが見える」キャンパス

提案時から試行錯誤を繰り返し完成した「アトリエ的学び」の発現するプレゼンテーションベイ

真に開かれた大学を目指し アトリエ的な学びを実現

―― 未来大では開学当初からプロジェクト学習を重視してきました。年に一度、その学習成果を市民の方にも見ていただく発表会を学内で開催していますが、その際にもこの仕切りのない開放的な空間が大きな役割を果たしています。日々の学習風景や研究の様子も周りの人から丸見え状態。これがまさに未来大らしい学びを実現していますが、実際に仕切りをなくすというのは、かなり思い切った試みだったのではないでしょうか。

山本　学んだり研究したりすることは、必ず他者がそこにいないと成り立たないと思います。芸術家は一人になってしまったらもうおしまい。モノを作るとき、ひとりぼっちになって穴蔵の中で作るようになったら、その芸術家は敗北だというのが私の持論です。クリエイティブな現場には必ず他者がそばにいて、時には自分が他者の目になる。そうしてはじめて芸術活動ができるのだと思っています。未来大の2つの学科もまさにそうした立ち位置で教育や研究を始めたのです。

提案にあたり、未来大の先生たちと情報系大学の未来について話をしました。近い将来、あらゆることがインターネット上にある情報空間の中で伝えられると思うか、それとも生身の体がそこにない限り伝達できないか、未来はどちらの方向に進んで行くのかということを議論した記憶があります。

その時も今も、私の思いは同じです。人と会うときは相手の目を見て、体の調子はどうか、機嫌がいいか、怒っているのか、そのような人間らしい部分を敏感に察知しますよね。それが一番大事だと思います。ということは、単なる情報空間の中でのコミュニケーションだけでは、かなり大きなものが伝達されないまま残ってしまうのではないかと思うのです。この未来大のキャンパスはまさに相手が見える場所。生身の体がそこにいることが相手に伝わって、初めて大切な情報が伝達できるのだと思います。

―― 隣の人の話が聞こえる、廊下を歩いているだけでだれかが勉強する様子が見える、そういうオープンな場所での学びを、未来大では「アトリエ的学び」と呼んでいます。まさに江戸時代の寺小屋のような学びです。

山本　長い間、日本の教育現場では学習環境として周囲の雑音がある場所は集中を妨げるという考え方でした。そのため、教室は一つひとつ仕切る必要があったのです。

しかし大きな一つの空間の中でも、いくつもの教育研究活動が同時に展開できることを、未来大が実証しています。寺小屋空間になることは、ある程度意図していましたが、それ以上の活用をされているように思います。私が一番驚いたのは、開学して間もないころ、物理の先生が1階の円形のプレゼンテーションベイを使って、授業とは関係なく、お昼休みに実験を披露していたことです。それを学生たちが通りすがりに立ち止まって見たり、お弁当を食べながら見たり。まるで実験ショーの大道芸人みたいで、その空間が劇場になったような感じでした。まさに先生にとっては、そこがステージです。そうやって自由に空間を使ってもらえているのを見て泣くほどうれしかったですね。

―― 未来大にはユニークな教員が多いので、自由にいろいろなことをやっています。そこには空間の果たす力も大きいのではないでしょうか。何かやりたくなってしまう空間の力があります。

山本　確かに空間の影響もあるかもしれませんが、未来大にはそれを許す“作法”のようなものが醸成されているのだと思います。

「静かな図書館なんていらない」設計時からあったラーニングコモンズという考え方

―― このキャンパスは2002年に日本建築学会賞を受賞して注目を浴びるなど、開学当初から今に至るまで、多方面から見学の依頼が絶えません。特にここ数年は文科省がアクティブラーニングを推奨しており、それに適したキャンパスのモデルとされることもあります。アメリカでは大学の図書館をもっと公共に開かれた場所として活用するラーニングコモンズという考え方も広がっています。その言葉が日本に入ってくる以前から、山本さんはこのキャンパスの設計にアクティブラーニング、ラーニングコモンズという考え方を取り入れてくださいました。

山本　はじめに「静かな図書館なんていらない。図書館はうるさくていいんだ」とおっしゃったのは、未来大の先生だったんですよ。その意見がとても新鮮で、確かに図書館は本を見ながら議論するところだと改めて思ったのです。

それ以前に、系列別教科教室型の岩手山中学校を設計した経験も関係しているかもしれませんね。系列別教科教室型とは、英語と国語、理科と算数、社会と家庭科、音楽と美術を系列教科として関連付けながら授業を展開することで、系列教科の先生は常に一緒にいるということになります。

設計の過程で、はじめは自分のスペースを専有化したいと考えていた先生たちも、話せば話すほどどんどんオープンスペースに対して前向きになっていきました。未来大ほどの巨大なオープンスペースではありませんが、その中学校はある程度開かれた空間で授業を展開しています。しかし、未来大ほどの巨大な空間は、他ではなかなか実現できませんでした。

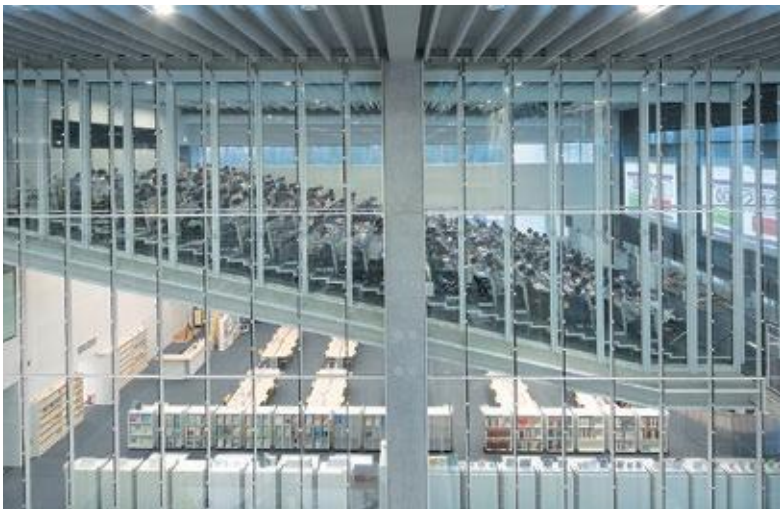
幸せな学校づくりに生きる未来大のDNA

―― 静かではない図書館が、未来大ではスタジオという場になったのだと思います。現在、山本さんは2022年春に移転する名古屋造形大学の設計を手掛けていらっしゃいますね。自らが学長を務める、新しい名古屋造形大の設計にも未来大で経験されたことは、“DNA”のようなものとして、どこかに生かされているのでしょうか。

山本　もちろん、完璧に生きていますよ。名古屋造形大も、基本的には間仕切りのない空間を５つの研究領域ごとにゾーニングして使います。教員たちの研究室を置かず、学生たちと同じ空間で仕事をしてもらう予定です。

ぜひ本学の教員たちに、未来大の授業を見てもらいたいと思っています。そして、近い将来、未来大と造形大で一緒に何か面白いことができるといいですね。

未来大での経験は私にとってはひとつの革命でした。これから先、未来大のように学ぶ人、教える人にとって幸せな空間が増えていくことに期待したいと思っています。



ガラス張りの壁で教室の様子がわかる「Kujira（講堂）」